

## 実践報告

### 絵本を活用した福祉ボランティア活動報告

The Report of Volunteer Activities Using Story Books

三浦文恵

**要約** 本報告は福祉分野におけるゼミナール活動として八戸市での読み聞かせ等の社会貢献活動に参加した学生の記録である。近年、コミュニケーションを苦手とする若者が多くなり、多様なテーマを描いた絵本を活用して学生が地域での活動に参加し、絵本の読み聞かせやステージでの群読といった音声表現活動を通して何を体験しどう感じたかを記すこととした。学生が参加した福祉分野でのボランティア活動を紹介し、福祉分野での就労や将来親となる世代の学生にとって、コミュニケーション力を身につけ、聞き手に伝える読み聞かせを通して、職場や地域社会での今後の成長に結びつくきっかけとなることを期待する。

#### 1 はじめに

この実践報告は、介護福祉学科の学生がゼミナール活動として八戸市内で開催された催しに参加し、読み聞かせ等の活動を行った記録である。ゼミナールでは、学生が興味をもつテーマに沿った内容を選択して活動を行っているが、報告は介護福祉学科の特性上、福祉分野やそれに関連するイベントや活動が中心となっている。

#### 2 経緯について

授業や活動を通して学生と接する機会は多いが、近年とみにコミュニケーションに苦手意識をもついわゆる「コミュ障」の若者が増えてきている実感がある。子どもの頃から携帯電話やスマートフォンを日常的に駆使するデジタル世代の若者は、多くが実際の対面でのやり取りを不得手とする自覚があり、可能な限り対面でのコミュニケーションを避ける傾向があることを危惧していた。多くの人々が他人とコミュニケーションをとる機会が減ると「孤独感」というネガティブな感情を抱き、この状態が続くと共感や他人の気持ちを推し

量るといったコミュニケーションに重要な役割を果たしている脳の機能が衰える可能性があると考えられている<sup>(1)</sup>。また学生は、授業や課題でわからないことがあるとすぐ検索エンジンで調べるが、あまりに気軽にスマートフォンで調べられるために、調べた内容や結果を覚えようとしないグーグル効果やデジタル性健忘と呼ばれる現象が起こる<sup>(2)</sup>。

介護福祉学科で学ぶ学生はほとんどが二十歳前の若者であり、卒業後は介護福祉施設での就労を目指している。彼らは授業で生活支援や介護技術等の専門科目を学び実習に臨むが、多くが高齢の利用者とのコミュニケーションでつまずき、悩みを訴えることが少なくない。病気や障害、高齢の利用者のケアにあたっては、ただ単純に求められる介護サービスを提供するだけでなく、いかに利用者が快適に安心してサービスを受けられるかが重要である。そのため本学では、利用者とのコミュニケーションに関する学習にも力を入れているが、ケアを行う間の話しかけや会話で何をどう話したらよいか悩むという相談を学生から受けるようになった。





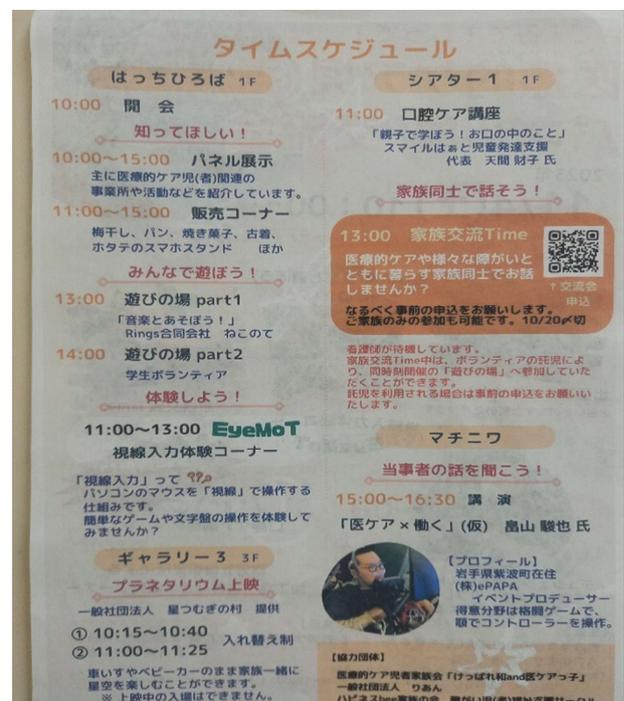
＜ボランティア・市民活動フェスティバル＞  
受付での活動

ゼミナールの学生2名が終日ボランティアに参加し、受付での案内、スタンプラリー、ステージ発表の舞台準備、群読への出演、各団体ブースの手伝い等を行った。これらの活動の間には、各出展団体の活動の様子を紹介するパネルやポスターを見て、自分たちが住む地域にどのような団体があるか、どんな活動を行っているかを学ぶ良い機会となった。また、受付や案内を担当したことで大勢の市民と直接会話する時間が多く、質問に対する答え方や効率的な案内の工夫、迷子や落とし物への対処等、普段経験することがない状況でのコミュニケーションを実践で経験し、多くの気づきがあった、と話していた。

ステージ発表では、8月ということで筆者が代表を務める八戸市読み聞かせボランティア「青い鳥」による戦争・原爆をテーマとした「伸ちゃんのさんりんしゃ」の群読に参加、ステージでの発表のための声量・活舌・舞台での所作等、対面でのコミュニケーションと異なる状況を体験した。数人で物語や台詞を読む群読では、背景画像や効果音楽とタイミングを合わせる初めての体験をし、ステージ発表の難しさ・楽しさを実感したようであった。余談であるが、この日ステージ発表予定の県内の大学サークルが自己都合で当日朝に

出演をキャンセルしたため、スケジュール調整や代替出演の交渉等の慌ただしい様子を運営側の立場で観察することができ、思わぬ貴重な体験となった。

(2) きて！みて！しって！医療的ケア児（者）  
パネル展・交流会（2023/11/4）



＜医療的ケア児（者）パネル展・交流会＞

上：チラシ表  
下：チラシ裏

青森県重症心身障害児（者）を守る会・八戸の医ケアを考える会の主催で行われたこのイベントには初めて介護福祉学科とゼミナールの学生2名が参加した。医療器具を搭載した車椅子や人工呼吸器を使用する医療的ケア児が遊ぶ場や機会の提供を目的とした催しで、筋ジストロフィー患者でイベントプロデューサーの畠山駿也氏による当事者特別講演の他、出張プラネタリウム、視線入力体験講座、口腔ケア講座、遊びの場等設けられた。

授業で車椅子を扱う学生は、プラネタリウム上映時の鑑賞補助や遊び場への移動補助、家族交流時の付き添い等、主に医療的ケア児の車椅子操作や移動補助を行った。学生は多重障害を抱える子どもとの意思疎通や医療器具と共に移動させる車椅子操作等に苦勞していたが、絵本の読み聞かせを通して交流を図り、子どもたちがかわいくて楽しかったと話していた。また、今回のイベントに参加し様々な福祉団体や家族会の活動に触れて、障害児（者）がどうすれば自立した生活を送ることができるか、そのためにはどんなことが必要なのかを考えることができた感想を述べた。

(3) 八戸市市民活動サポートセンターふれあいセンターわいぐ交流会～未来に向かい、新しい活動へ出発！（2023/11/12）

八戸市民のまちづくりやボランティア活動を支援する拠点わいぐ主催の交流会は、八戸市内23団体が参加して行われた。地域連携・協働をテーマに八戸学院大学地域経営学部の堤静子教授、八戸工業大学事務部の大野和弘部長が基調講演を行った後、市民活動を行う各団体が活動を紹介し他団体と交流、わいぐキャラクターの名前募集結果発表やパネル展示、ステージ発表が行われた。このイベントにも、ゼミナールの学生2名が参加したが、そのうち1名が留学生で、参加団体や会場を

訪れた市民と日本や八戸のことをいろいろ話して楽しく交流した。

八戸市市民活動サポートセンターふれあいセンター  
**わいぐ交流会** 参加無料  
 未来に向かい、新しい活動へ出発！  
 令和5年 11月12日(日) 10:00～15:00  
 会場 八戸ポータルミュージアムはっち はっちひろば、ギャラリー1  
**交流会内容**  
 ・基調講演  
 テーマ 地域連携・協働のポイント  
 講師：堤 静子 氏 (八戸学院大学 地域経営学部地域経営学科教授)  
 講師：大野 和弘 氏 (八戸工業大学 社会連携学術推進室次長)  
 ・八戸市市民活動サポートセンターの紹介  
 ・市民活動団体による活動紹介  
 ・わいぐキャラクターネーム発表  
 ・活動団体によるステージ発表  
 ・登録団体紹介パネル展示・ブース出展  
 みんな、遊びにきてね！  
 出展予定ブース一部紹介  
 ・八戸市明るい選挙推進協議会  
 ・サステナぶる  
 ・はちのへ市民後見人連絡会  
 ・八戸市手話サークルこすもす  
 ステージ発表予定団体  
 ・八戸市読み聞かせボランティア「わいぐ」  
 ・南部首こキャラバン隊  
 ・TEAM 響  
 ・tomoshibi+  
 お問い合わせ先 八戸市市民活動サポートセンターふれあいセンターわいぐ  
 〒039-1166 八戸市横城8丁目8-155 八戸市総合福祉会館3F  
 電話 0178-73-3311 E-MAIL support@waigu.info  
 WEB http://www.waigu.info/ ホームページQRコード



<八戸市市民活動サポートセンターふれあいセンターわいぐ交流会>

上：交流会チラシ

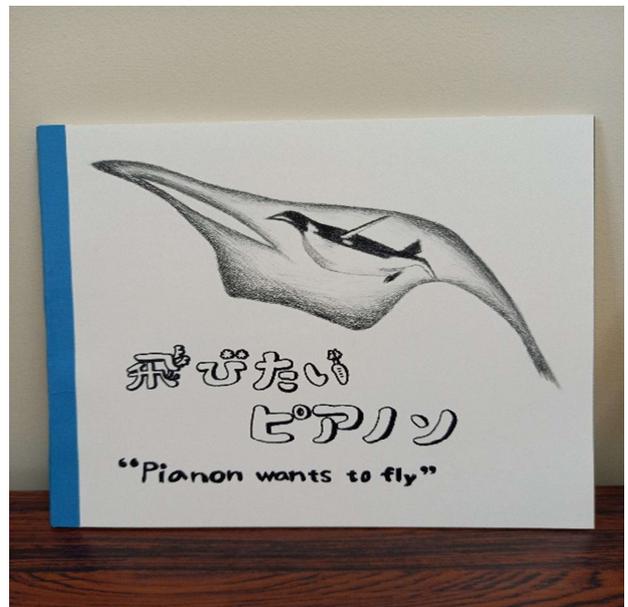
下：わいぐキャラクターネーム発表

この交流会でのステージ発表では、小児がん患者の子どもをもつ「tomoshibi+（ともし

びプラス)」の米田親弘代表が小児がんや団体設立の経緯について話をした後、八戸市読み聞かせボランティア「青い鳥」が、青森県初の小児がん親の会「tomoshibi+」とのコラボレーション企画で、小児がん患者の子どもが自らの闘病体験を綴って製作した絵本「ぼくはレモネードやさん」を読み聞かせ、絵本の画像を見せながら学生も参加した。米国で小児がん撲滅のための寄付金集めを目的に始まったレモネードを売るレモネードスタンドのエピソードも披露して開設され、読み聞かせ終了後に学生も販売に協力した。

(4)福祉をテーマとする絵本の読み聞かせ

年代を問わず人気のある絵本だが、特定のテーマを取り上げて製作されるものも多い。これまでゼミナール活動で読み聞かせに使用した絵本は、伝わりやすさを意識してできる限り明確なテーマをもったものを選択してきた。



＜八戸市民活動サポートセンターふれあいセンターわいぐ交流会＞

上：読み聞かせた絵本<sup>(3)</sup>  
下：ステージでの群読

＜福祉をテーマに製作した絵本＞

上：骨髄バンク普及活動に賛同<sup>(4)</sup>  
下：障害児自身が製作<sup>(5)</sup>

例をあげると、

- ・医療福祉
- ・障害者理解
- ・いのちの大切さ
- ・友情
- ・動物愛護
- ・自立
- ・他者への思いやり
- ・異文化理解
- ・環境保護
- ・勇気
- ・郷土愛
- ・英語でも書かれた物語

(筆者の英語の授業の教材としても使用)

等がある。メッセージや教訓を直接訴えるより、絵本の中の物語として読み聞かせる方が子どもには親しみやすく、伝わりやすいと言われる。読み聞かせに最初は特段興味を示さなかった学生も、福祉関連のイベントでの読み聞かせや群読を経験することにより、これまで知らなかった絵本のもつテーマやメッセージについて考えるきっかけとなった、と感想を述べていた。

#### 4 課題と考察

##### (1) 人員不足

学生をゼミナール活動の一環として読み聞かせに参加させるには、平日は授業の合間を利用し、週末はアルバイトや家事に充てるため、あらかじめかなり時間的余裕をもって予定を立てておく必要がある。しかし、コロナを初めとする感染症のため授業や補講、実習日程の直前の変更や、人手不足による空き時間のアルバイトのシフト変更の困難さにより、思うようにボランティア参加のための時間が確保できないことが多い。そのため、学生だけを独立した読み聞かせ担当に充てることにはリスクが伴うため、筆者が代表を務める読み聞かせ団体「青い鳥」の活動の補助的役割として参加せざるを得ないケースが多い。

##### (2) スキル向上の制限

読み聞かせを行うには、ある程度の発声や滑舌のトレーニングが欠かせない。残念ながら十分ば練習時間を取れないまま学生が臨む場合もあり、思うように表現できずにモチベーションを保てなくなるケースもある。読み聞かせは発声を伴うため、コロナが第5類に移行した後も、感染の再拡大やインフルエンザ等他の感染症蔓延のため、マスク着用の継続を求められる場所やイベントもまだ多く、声量をうまく調整できない学生には参加が難しいケースもあった。

##### (3) 継続の困難

学生を授業の一環として活動に参加させる以上、いずれは卒業してしまいそこで活動は終わりを迎える。特に高等教育機関の卒業後は就職で地元を離れる学生が多く、せっかくスキルが向上して戦力となっても、継続的な活動にはなかなか結び付かない。

##### (4) 聞き手の受け止め方の変化

これまで様々な年齢層に読み聞かせを行ってきたが、テーマやメッセージの捉え方にも変化が出てきた。昨年、小学校の高学年を相手に「小学生のボクは鬼のようなお母さんにナスビを売らされました。」<sup>(6)</sup>という実話の絵本を読み聞かせた時、実際は病気の親が子どもの自立を願って厳しく接した内容だが、途中で「ハラスメントではないか」という声が子どもたちから上がった。最後まで読んで感想を述べる前にこのような状況になったのは初めてで、途中で話しかけることはしないのだが最後まで聴くように注意した。小学校での読み聞かせの場合、終わりに感想を数人が述べることが多いのだが、最近では時間割の都合もあるのか感想を子どもに訊ねないクラスも増えてきた。読み聞かせの感想を子どもに訊ねることについては賛否が分かれるところだが、意図した受け止め方をしたかどうか

の判断材料にはなるという点で、読み聞かせを行った側としては良いフィードバックとなるため、こうした変化は興味深い。

#### 5 終わりに

読み聞かせは子どもの感性を磨く重要なもので、子どもが絵本の読み聞かせを聞く時は、言葉、感情、記憶に関わる脳活動が強まるという<sup>(7)</sup>。更に読み聞かせは親と子どもの本を通じたコミュニケーションで、子どもだけでなく親にも変化を及ぼす可能性があり、幼児への読み聞かせを行った時の脳は、前頭葉の真ん中の相手を思いやる領域、コミュニケーションを司る領域が一番働いていたという<sup>(8)</sup>。更に人間の生の声には強い影響力があり、人工的な機械を通した声からは得られない癒し

の効果があるとされている。それは聴く側だけでなく、読み聞かせを行う側にも同様のメリットがあると言われ、これが黙って本の文字を追う普通の読書と違う点であるという<sup>(9)</sup>。

近年、幼児や子ども向けのみならず、多様なテーマを描いた大人向けの絵本が多く出版されるようになった。そのような絵本人気を背景に、地域での活動を通して、参加した学生が何を体験しどう感じたかを記すことで、今後の成長の参考になるのではないかと考えた。読み聞かせの重要性が認識されていくのに伴い、福祉分野での就労や将来親となる世代の学生にとって、読み聞かせを通して今後も地域社会での活動を継続していく意義について考えるきっかけとなることを期待する。

#### <参考文献および資料>

- (1) 榊浩平著・川島隆太監修「スマホはどこまで脳を壊すか」朝日新聞出版 2023年
- (2) アンデシュ・ハンセン「スマホ脳」株式会社新潮社 2020年
- (3) えいしましろう「ぼくはレモネードやさん」生活の医療社 2019年
- (4) ゆう「あした、えがおになーれ」星雲社 2022年
- (5) Ryo.S「飛びたいピアノン Pianon wants to fly」C-Flower 2021年
- (6) 原田剛「小学生のボクは鬼のようなお母さんにナスビを売らされました。」株式会社ワイヤーオレンジ 2014年
- (7) 川島隆太「スマホ依存が脳を傷つける～デジタルドラッグの罠」株式会社宝島社 2023年
- (8) 川島隆太・土屋秀宇「読書習慣が学力を決める」致知出版社 2019年
- (9) 瀧川栄太監修「いのち輝く日本語の世界」明治図書 2002年

#### ・執筆者紹介（所属）

三浦 文恵 八戸学院大学短期大学部介護福祉学科 教授